

いたちかわらばん

通刊48号 鮰川・独川 / 川原番・瓦版 '10 冬号

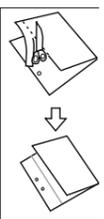


【版画 宗森 英夫】

上流から見た城山橋

切り取り線

この部分を切り取ってファイルにすると便利です



「夕焼け小焼け」大正八年発表、中村雨紅作詞、草川信作曲
「七つの子」大正十年発表、野口雨情作詞、本居長世作曲
（注）童謡「夕日」大正十年発表、葛原しげる作詞、室崎琴月作曲

ギンギンギラギラ...
♪ギンギンギラギラ夕日が沈む／ギンギンギラ日
が沈む／真っ赤っかっか空の雲々と歌う童謡をご存知です
か？ 多分多くの人が「知ってるー（夕日）だー」と答
えるでしょう。ではその二番の歌詞は？と聞いたらどうし
ょうか。今度は多くの人が「知らないー」と言うでしょう。
♪カラスよ／お日を追っかけて／真っ赤に染まって舞って
来いよというのが「夕日」の二番の歌詞です。
♪カラスなぜ啼くのの「七つの子」や、♪♪おててつ
ないでみなかえろ／カラスと一緒に帰りましょの「夕焼
け小焼け」など、現代では愛されることが少なく、むし
ろごみ漁りなどで憎まれる役の多いカラスたちを明治の先
人はどうしてこうまで愛して歌ったのでしょうか？ 昔の
カラスが今とは別の可愛いカラスだった訳でもなく、同じ
くカアカアと啼く真っ黒な奴だったはずなのに...です。
つまるところ、当時の人々は今と違ってもっと自然をい
つくしんでいて、自然に接する視線が優しく柔らかかつ
たからではないのでしょうか。
今、二一世紀の世では「自然との共生」が叫ばれていま
すがこのような「柔らか視線」を持たずして自然との共生
はなく、豊かな自然が維持され広がることもないでしょう。
そこで、せめて私たちは、身近ないたち川を住みかとし
る数多くの生物たちに「柔らか視線」で接したいものだ
と思いませんか？がでしょうか。（ピンテール）

いたち川の生き物たちへの思い

4年生は国語の時間に「とんぼの楽園づくり」という文章を読む機会があります。その文章には自然保護について「さまざまな生物がともに生きていくことのできる環境」をつくっていくことが重要という記述がありますが、そんな環境が僕らの身近にも存在しています。それはいたち川。そこで実際に見に行くことにしました。

児童の感想

9月にいたち川で魚とりをした。流れが速いところにはヨシノボリ、ゆっくりなところにはアメンボがいた。それを教えてくれたのは和久井さんだった。日があたっているところでは「ヤゴがいそうだね」と言っていた。4年生全員で取った生き物を集めるといっばいいた。いたち川はめずらしい生き物がいるから、ゴミなどを捨てないで生き物と自然を守りたいです。（Aくん）

私たちはいたち川に勉強に行きました。和久井さんと栄土木事務所の方たちが来て下さいました。昔のいたち川はボウフラだらけで、とても魚が住める川ではなかったそうです。それを和久井さんたちが工夫をして、魚が住める川にしたのです。でも、それには苦勞がありました。周りをコンクリートで固めると、夏に太陽のカンカン照りに当たって水まで温まってしまうので、両端に土を盛って草を植えて水温を抑えたのです。そんな和久井さんたちの話を聞いて、私たちはメダカを育ててトンボ池を作ったり鳥をよんだりなどの計画を立てて、いたち川のように自然いっばいの小学校にすることを目標にしています。（Bさん）

ぼくはいたち川に行って川に入りました。あまりぼくがしたことのない体験だったので、すごく楽しかったです。「魚は水草のところなどに隠れています。下流側に網を入れ、上流から足で追い込んでつかまえるんだよ。」と和久井さんたちが教えてくれました。ぼくは友だちとドジョウをつかまえました。さわってみるとヌルヌルしていま

した。あとヨシノボリもつかまえました。腹に吸盤があるということを知って、「不思議だな」と思いました。私たちは生き物を大切に、もっと生き物のことを知りたいです。（Cくん）

いたち川に行って学習したことを、今後の総合的な学習の時間や「しらすぎまつり」の発表、普段の生活に生かしていきたいと思えます。

☆君はオナガガモを見たくないかい？

冬に日本にやってくる渡り鳥としては「ツル」「白鳥」「ガン」など沢山の種類がありますが何と言っても代表的なものは「カモ」です。

その殆んどが沿海州や極東シベリア、アラスカなどから飛来しますが、約8,400km離れた中央アジアのウクライナから飛んできた例もあります。「カモ」は水鳥ですが、水に潜るものと潜らないものとがいます。お尻が下がっている（潜る）か、上がっている（潜らない）かで区別できます。潜るカモは水面から一気に飛び立つことができますが、潜らないのは滑走してから飛び立ちます。

いたち川でもよく見られる「オナガガモ」は飾りピンのように長く伸びた尾羽が特徴で、水中に逆立ちすることでも有名ですね。この鳥は英語で“Pintail”と言います。本郷小の裏手の川沿いにある休憩所の手すりにこの「オナガガモ」の写真が掲示されていますから知っている方も多いことと思います。

2月6日（土）は「いたち川知り隊」がいたち川に来る冬の野鳥を観察する日です。

（隊員を募集中、締め切り：12月24日（木））

「オナガガモ」を初めとするたくさんの鳥たちに逢えるように期待をこめながらその日を待っているところです。（ピンテール）

◆「いたち川知り隊」の野鳥観察会に参加希望者は下記までお問い合わせください ◆
栄区役所地域振興課 電話 894-8396

発行年月
2010年1月

通刊48号

発行：独川OTASUKE隊（いたちがわおたすけたい）

OTASUKE隊事務局：栄区役所区政推進課企画調整係 〒247-0005 横浜市栄区桂町303-19
TEL 045-894-8161 FAX 045-895-2260
栄土木事務所下水道・公園係 〒247-0007 横浜市栄区小菅ヶ谷1-6-1
TEL 045-895-1411 FAX 045-895-1421
（お便り・お問い合わせはこちらまで）



クレソン 別名オランダガラシ (あぶらな科) [ヨーロッパ原産]

多年草、高さ15~30cm、花期：春~夏、葉は波状複葉、明治3~4年頃渡来、白色の十字状花で辛みのある葉であることからオランダガラシの名前の由来。通刊22号



シヨカッサイ 別名オオアラセイトウ、ハナダイコン (あぶらな科) [中国原産]

2年草、高さ20~60cm 花期：春 江戸時代に輸入され、油を採取するため栽培されたものが野生化した。園芸種のストックの原種、日本名はムラサキハナナ。通刊33号



ヒメオドリコソウ (しそ科)

[ヨーロッパ原産] 越年草、高さ15~30cm、花期：春~夏 都市周辺で普通にみられる雑草で群生して小さい紅紫色の花を咲かせる。初めは東アジア、北アメリカに帰化し、日本には明治26年東京の駒場で発見されたのが最初。

シロツメグサ (まめ科)

[ヨーロッパ原産] 多年草、高さ15~20cm、江戸時代にオランダからの荷物に詰め物として渡来。一般にはクローバーとして親しまれている。



ヒメツルソバ (たで科)

[ヒマラヤ地方原産] 多年草 高さ10cm、明治時代に観賞用として導入されたのが野生化した。いたち川の川辺に出ているものは同類のミソソバで、この葉をカワニナは好物としている。



コバンソウ 別名タワラムギ (いね科)

[ヨーロッパ原産] 1年草、高さ20~60cm、花期：夏 明治時代に渡来し、観賞用に栽培されドライフラワーとして各地に搬送されたことにより野生化した。



コセンダングサ (きく科)

[熱帯アメリカ原産] 1年草、高さ50~100cm、花期：夏~秋 葉の形が樹木のセンダンの葉に似る。茎は直立、大正時代に帰化し、筒状花で実になると先に3~4個の刺があり衣服に付く、この付着した種子を見た人がマジックテープを発明したと言われる。



イガオナモミ (きく科)

[北アメリカ原産] 1年草 高さ80~150cm、花期：夏~秋 帰化した時期は第二次大戦中と言われる。果包の表面に刺が密生して衣服に付着する。大きいものをオオオナモミと言う。

いたち川の河川敷で見られる外来植物

いたち川周辺ではいろいろな植物がみられます。ここに取り上げました植物は、いたち川の河川敷でよくみられる外来野草の主なものです。『いたちかわらばん』において過去に取り上げて解説した野草もかなりあります。それらは、解説のところに通刊号数を表記してあります。いたち川の散策道を歩きながら気付く野草の中で最大のものはセイタカアワダチソウとオオバクサです。大きいうえに黄色い花がよく目立ちます。とくにセイタカアワダチソウの花はきれいです。河川敷では外来種がはばをきかせ、可憐な野草とはほど遠く草と言うより樹木と言った方がよいほどの存在です。

この外来種の増加現象は、外国から輸入する穀物、特に飼料穀物の増大と共にこれからも増えることでしょう。私の故郷でのごと、道路脇の草地の至る所に黄色のたこ糸を太くしたようなものが雑草にからみついでいました。数年前までは見られなかった光景です。知人に聞きましたところ、この奇妙な植物(アメリカ原産のネナシカズラ)は、種子が牛の輸入飼料に混じって国内に入り、牛の体内を通過して糞と共にばらまかれるようになります。これでは防げません。



ジュズダマ (いね科)

[熱帯アジア原産] 多年草 高さ50~80cm、花期：夏~秋 穀物として栽培されているハトムギの原種。果実は子どもの遊び道具の材料として、お手玉や、糸をおして首飾りなどに使われていた。通刊27号



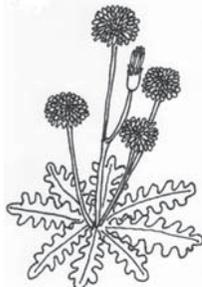
セイタカアワダチソウ (きく科)

[北アメリカ原産] 多年草 高さ2~4m、花期：秋、明治時代に帰化し、北九州地方で炭田の閉山があると群生したことから「閉山草」とよばれていた。種子と地下茎で繁茂し根から他の植物が発芽しないような物質を分泌して自分の勢力範囲を広げている。



オオバクサ 別名クワモドキ (きく科)

[北アメリカ原産] 1年草、花期：夏~秋 高さ3m以上になり、根元の径は5cmくらいになる。戦後に帰化し、河原や造成地に群生する。バクサと共に花粉症の原因と言われている。通刊35号



ボタン 別名タンポポモドキ (きく科)

[ヨーロッパ原産] 多年草、高さ30~50cm、花期：春~秋、1930年代に札幌と神戸で野生化が確認された。名前の由来はフランスで隣のサラダと呼ばれたことから付いたと言われる。



ワルナスビ (なす科)

[北アメリカ原産] 多年草、高さ40~80cm、花期：夏、明治初期に千葉県で発見された。雑草としてはびこるが刺があるので抜くのに骨が折れる。



アレチウリ (うり科)

[北アメリカ原産] 1年草、花期：夏~秋 つる性で10m以上に伸びる。大きな葉で他の植物を覆いつくし他の植物を死滅させる。下流域に多かったが、最近では石原橋周辺でもみられる。戦後に帰化し、果実は星状で表面に細かい刺があり触ると刺さる。通刊31号